

## 博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	中嶋 諒
論文題目	陸九淵と陳亮－朱熹論敵の思想研究－
審査要旨	
<p>宋の陸九淵(陸象山)は、中国思想史上では朱熹(朱子)の論敵として、明の王守仁(陽明)の先駆として語られる。しかしそのような通念が、ともすれば陸九淵の思想の実像の解明を妨げていた。また陸九淵の同時代の陳亮(龍川)も、朱熹の論敵としての面がクローズアップされてきたため同様の状況にあった。従来、朱熹が左の極端な例として陸九淵を、右の極端な例として陳亮を置き、自分は中庸を得ていると称していたのをもとにして、朱熹の両サイドに陸九淵と陳亮があり、それで当時の思想状況の全体的な見取り図が示せるかのように見なされがちであった。それに対して著者は本論文で陸九淵と陳亮の原典に立ち返り、徹底して彼ら自身の文脈をたどりながら読み込み、その思想の原像を解明しようとした。それによって陸九淵を直観的心学者、陳亮を政治経済至上主義者とする従来の彼らの像が必ずしも彼らの思想を正確に伝えたものではないことを明らかにした。このことは当時の思想界における彼らの位置の再検証を迫るものである。</p> <p>著者は陸九淵が単に万人の心をそのまま本来の理と認定しているわけではないことを指摘し、「一般人にすでに聖性が発露されていると主張した陸九淵」という従来の見方に反省を迫る。著者は、陸九淵が学問の主発点としての孝の強調や、心における公私の弁別を重視していることに注目する。そして、最初に他者と共有できる心の公領域を直感的に確定することで心の私領域を明確化し、今度はその私領域を他者との講学(集団学習)によって消していくことで心全体を公領域にする、という陸九淵独自の学問の構造を描き出している。陸九淵のそれぞれの語は、日常の心の状態についてのものと、本来的善性が発揮されている状態についてのものがあり、しかも同じ語が用いて語られている。著者はこのような用語の二重使用に細心の注意をはらいながら、それぞれの語が人間のどのレベルに対して言われたものかを切り分けながら議論を進める。かかる著者の作業によって、複数の人間による知の動員に対して陸九淵は消極的であると従来言われてきた見方が改められ、むしろ彼は積極的にそれらの意味を認め奨励していたことが明らかにされた。また「六経、我を註す。我、六経を註せんや」という語から陸九淵が否定的であるとされていた経学についても、著者は具体的事例として陸九淵が『春秋』の注釈書を作成する構想を持っていたことを掘り起こし、その『春秋』理解がどのようなものであったかを考察している。著者によれば、陸九淵は弟子の楊簡と異なり、心の問題を前面に出さず、むしろ唐の啖助や趙匡への共感を持ち、解釈の基本方針もその路線の陸淳編『春秋集伝纂例』と一致していた。この基本方針とは、『春秋』に限らず経書全般の内容を見通したうえで、改めて『春秋』の記事から各国の政策の是非を探り、その非なるものを弾劾していくというものであって、著者はここでも従来の一般的見方と異なった陸九淵の姿が現れているとする。これらの指摘は従来なされていなかったもので、本論文の意義の一つであろう。</p> <p>また陸九淵の基本文献である『象山先生全集』に関するテキスト研究もなされているが、これも単なる書誌学研究にとどまらず、文集編集方針が後世の陸九淵に対する先入観に影響している具体例の提示となっている。たとえば「心即理」は、同じ語を王守仁が使うことから、陽明学の先駆としての陸九淵の立場を象徴する語とされるが、この語が目立つようになるのは、李茂元本がこの語が出てくる書簡を前に持ち出す形に編集しなおしてからであり、他の事例もあわせてこのテキストの編集方式が王守仁(王陽明)の朱陸観に合わせたものであることを指摘している。</p> <p>一方、陸九淵とともに朱熹の論敵として知られる陳亮については、陳亮が朱熹ら道学者の「儒士」のみならず、実務派官僚で富国強兵の実現のみを身上とする「才臣」を批判する姿勢を持っていたことを指摘する。また陳亮の議論の力点が道の通時的恒常性の主張にあり、政治的達成のみを重視した思想の持ち主と見なす朱熹の陳亮批判</p>	

が正鵠を射ていないことも明らかにしている。著者は陳亮の学説が変化していく過程をたどりながら考証を進め、従来の陳亮論が見逃しがちであった朱熹らの道学に近接する陳亮の側面を明らかにしている。なお陳亮は永康学派であるが、この学派とともに永嘉学派の諸儒をあわせて「事功派」と称される。著者はそこで今度は永嘉学派の陳傅良の思想とその陳亮観、朱陳論争観にも検討を加える。そして事功派内部の対立部分を明らかにするとともに、陳傅良の陳亮観が朱熹のそれと同じく陳亮の本来の思想と齟齬を見せていることも摘出する。このような作業から、永康学派にしる永嘉学派にしるいわゆる事功派なるものが単なる政治的達成のみを図る思想ではなく、修養の必要性や欲望の制御を説く面を持つことが浮かび上がり、それをふまえたうえで彼らと朱熹との距離をもう一度測り直す必要があることが主張される。これらの作業はみな朱熹を軸に構想されてきた南宋思想研究に対して根元的な反省を迫るものである。そして同時に朱熹自身の立ち位置自体の再検証もつながるものである。

著者はことさらに難解な表現を避け平易明晰を旨として議論を進めている。そのため極めてわかりやすきはあるが、時に思想分析の奥行きに物足りなさが感じられるところがある。またこの三者の關係に新たな光をあてるのであれば、陸九淵と陳亮のみならず朱熹本人の思想の再分析も必要になり、そのうえで従来と異なった三者比較の新たな視角を見出すべきではなかったのかという意見もあった。さらに従来対立ばかりが際だたされてきた朱熹、陸九淵、陳亮の三者の親近性が見えてきたことは評価できるとしても、当時の思想界全体において彼らの思想がいかに位置づけられるのかの見通しについてもっと十分な説明がなされるべきであるという指摘もあった。今後は、著者自身も自覚しているように、呂祖謙、張栻、永嘉学派の他の諸儒、湖南学の諸儒、さらには道学の周囲の外にある諸士大夫らをも視野に入れた研究の拡大と発展が望まれる。このような将来に向かっての課題はあるものの、総じて従来の朱熹論敵の研究から一歩進め、新たな視界を具体的に開いた点は評価できる。

以上から、本論文を博士学位授与にふさわしいと判断する。

公開審査会開催日	2013年10月1日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏名
主任審査委員	早稲田大学・文学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	土田 健次郎
審査委員	早稲田大学・文学学術院・教授		森 由利亜
審査委員	明治大学・文学部・教授	博士(文学)早稲田大学	垣内 景子
審査委員			
審査委員			